

赤色の果色でカットやスライス用に適する単為結果性トマト新品種 「試交10-2」の特性

～トマトの消費動向に沿い、生産現場の負担軽減に役立つ新品種です～

大川浩司（農業総合試験場 園芸研究部 野菜研究室）

【平成26年6月12日掲載】

【要約】

農業総合試験場が育成した生食用トマト新品種「試交10-2」は、果色は赤色で、200g程度の大玉となり、サラダやサンドイッチ等向けのカットやスライス用に適する特性を持つ。また、単為結果性（受粉・受精がなくても果実が形成される性質）を持つため、着果のための植物成長調節剤処理やマルハナバチ（訪花昆虫）等による受粉が不要となる。「試交10-2」は、消費者と生産者の双方のニーズに応えるトマト新品種である。

1 はじめに

愛知県のトマトは、生産量45,600t、産出額161億円(平成24年)で、最も重要な野菜の1つである。近年、トマトの消費では、サラダやサンドイッチ等向けのカットやスライス用途の需要が伸びている。一方、生産者からは、植物成長調節剤処理やマルハナバチ等による受粉が不要となる単為結果性品種が求められている。そこで、200g程度の大玉で、カットやスライス用に適する特性を有し、着果の省力及び低コスト化となる単為結果性を持つ生食用トマト新品種の育成に取り組んだ。

2 育成経過

平成17年度にオランダ(DE RUITER SEEDS)の多収性品種「グレース」と愛知農総試が保有する単為結果性固定系統「MP」を交雑し、新品種の育成を開始した。F₂世代以降、除雄処理による単為結果性の検定、DNAマーカーを用いた病害抵抗性検定、さらには果実特性及び収量性に基づく選抜・固定を行い、「GRMP5」、「GRMP100」を始め6つの固定系統を育成した。これらの固定系統のF₁組み合わせ検定を実施したところ、「GRMP100」×「GRMP5」である「試交10-2」が、単為結果性の発現が安定



写真1 「試交10-2」の果実

しており、大玉でカットやスライス用に適した果実形質を持ち、主な病害に抵抗性を示したことから、有望F₁系統と判断した。「試交10-2」について、平成23～24年度に場内での特性及び生産力検定、現地適応性検定を実施したところ、優れた形質を確認できたことから、平成25年5月に育成を完了し、平成26年3月に種苗法に基づく品種登録出願を行った(写真1)。

3 「試交10-2」の特性

果色が朱色に近い赤色で、スライスしたときにゼリー部分が落ちにくく、果汁の漏出（液だれ）が少ない果実特性を持つため（写真2）、サラダやサンドイッチなどの需要に向いている。糖度（Brix値）は、一般的な海外品種はもちろん、桃太郎ヨークよりも高い。果形は豊円で、空洞果の発生は少なく、花落ち部は小さい。1果重は200g程度で、単為結果性品種「ルネッサンス」より約20%重い。

形態・生態的特性としては、単為結果性を持つため、着果の省力及び低コスト化となる。開花及び成熟の早晚性は中生で、節間長は桃太郎ヨークより長く、葉は下垂するがコンパクトなため採光性はよい（写真3）。果実肥大期にみられる葉先枯れ症状の発生は少ない。

また、トマトモザイクウイルス（*Tm-2*型）、萎ちょう病（レース1，レース2）に病害抵抗性を有する。

適作型は、平坦地での促成栽培と半促成栽培、中山間地での夏秋栽培である。

4 栽培上の注意点

初期の生育はややおとなしく、単為結果性の発現により早めに着果するため、第1花房開花前のやや若苗を定植する。花数の多い花房は摘果を行い、追肥も第3花房開花以降、適宜実施して草勢の維持に努める。なお、通常、果頂部のとがりの発生は少ないが、低温期を経過する栽培では発生する場合がある。なお、本品種の種子は平成27年6月頃から販売される予定である。

5 おわりに

消費者と生産者の双方のニーズに応えた本品種の導入により、本県産トマトのさらなる消費拡大が期待される。



写真2 「試交10-2」の果実横断面



写真3 「試交10-2」の草姿